

佳作

「祖母と梅干しと私」

神奈川県 川崎市立富士見台小学校 六年 佐々木 桃子

今年の夏も、祖母の家の庭にたくさんザルが並んでいた。中身は梅干しだ。この梅干しは、まだ汁には漬かっていない。ただカラカラの塩がまわりに付いているだけのものだ。お日様のおいがして少し温かい。

いつもこの梅干しを祖母は、私と妹といとこの口に、ポイツと放りこんでくれる。塩っ辛いけど、とてもおいしい。いつもの祖母の味だ。祖母の家で過ごす夏休みのお楽しみだ。

ああ、こんな事を考えているだけで口の中がとても酸っぱくなってくる。

祖母の梅干しとの出合いは、まだ離乳食のおかゆにのせてもらい食べていた頃だ。その時は、顔をくしゃくしゃにしていたと言っ。

このように、梅干しと、赤ちゃんだった私との出合いは平凡だった。

しかし二年後、私は梅干しの味がわかる幼児に变身していた。

ともかく梅干しがだいすきで、一粒でたくさんのご飯を食べた記憶がある。

祖母は梅干しを作っている時、いつも空を見て天気を気にしている。その様子は、まるで自分の子供を世話しているかのようだ。

優しい目で、ていねいに一粒一粒を見ながら日に干す。

祖母の手のつめには、しその汁がしみこんでいても痛そうだ。私は祖母に、

「指、大丈夫？」

と、声をかける祖母は、

「なーんにも、痛くないよ。」

と、気にする風でもなく、笑いながら作業を続ける。そんな祖母の姿が私は大好きだ。

幼い日から今日まで、祖母の味は変わっていない。その味は濃く、とにかく酸っぱい。

スーパーで売っている物よりも赤みが強く、小粒で、祖母の顔や手のようにシワシワだ。

私にとって

「梅干しの味」とは、祖母の手作りのこの味しかない。だから祖母のこの味を受け継いでいきたい。私ができるようになったなら、家族のみんなに食べてほしい。もちろん一番食べてもらいたいのは、祖母だ。

けれど、できるだけ祖母に作り続けてもらい、長く私に食べさせてほしい。

「ピンポン」

玄関のチャイムが鳴った。

今年も祖母の梅干しが届いた。おばあちゃん、いつもおいしい梅干しを、本当にありがとう。